

2022年横浜ナザレン教会降誕節第九主日(2/27)礼拝

「聖霊なる御神」

使徒言行録第2章1節から第2章4節

【聖書】

使徒言行録 2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2: 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

1 聖霊は、御神。信じる対象

先ほど、ご一緒に使徒信条で信仰告白しました。そこに「**我は聖霊を信ず**」とありました。つまり、聖霊とは、天の御神であり、信じるお方だ、と告白しています。恥ずかしい話なのですが、私は洗礼を受けてからすぐに心から「**我は聖霊を信ず**」と告白できたわけではありません。父なる神と主なるイエス・キリストに対する信仰告白の続きに、『我は聖霊を信ず』とあるから、そのまま唱えているだけ、聖霊がどういうお方かがよく分からないままの告白とは言えない信仰告白でした。やがて、教会生活を送って行く内に、出来るだけ聖書を読むように導かれ、次のパウロの言葉に出会います。「**聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。**」(Iコリント12:3)また、「**知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。**」(Iコリント6:19)。これらの言葉から、2000年前にパレスティナ地方に生きたナザレ人イエスは、この私の罪を肩代わりし十字架に滅び、三日目に永遠の命へと甦らされた、このお方が今も生きて働き、私を導いてくださっている。そう信じられるのは、私自身の力ではなく、聖霊が私の内におられ働いてくださっているからこそ。イエス・キリストを「我が主、我が神」と告白できるのは、聖霊の力、そう気づかされて、信仰弱い私だけれども、既に聖霊が与えられて私の内に住んでいてくださってるのだなあ、と知った時の喜びは、今でもよく覚えています。

しかし、これらのパウロの言葉から、私は聖霊というお方が神である、という事を深く弁えていたか？というところではないように思います。「自分の内に与えられている聖霊」を無意識の内に「自分の自由になるもの」と勘違いして、思うように主イエスに従えない自分に苛立ち、時には聖霊の力を侮ったこともありました。

ルカは、今日の聖霊降臨の場面を通じて、聖霊というお方は、先ず何よりも、天の御神である、という事を読者に伝えたかったのではないかと、使徒言行録の聖霊降臨の場面を繰り返し読むことでそんな思いが与えられました。主イエス・キリストとは違う在り方の霊なる御神が、この地上に降り、私達に力強く働かれる方であることを、有名な聖霊降臨の場面から見て行きたいと思います。

2 聖霊降臨は、神の恵みの審き

先ず、最初に起こったこと、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」。「突然」という言葉から、聖霊が御神であることがうかがえます。天の御神を人はコントロールできません。聖霊なる御神は、誰よりも自由なお方で、想いもかけぬ時に突然、降って来られるお方です。

カールバルトは、今日の聖書の場面を次のように要約しています。「聖霊は、『嵐』と『火』として、選ばれた人々に、上から落ちかかったのだ」(バルト説教選集7 p37)。「聖霊なる御神が、上から人々に落ちかかってきた」とは面白い表現です。しかも、「嵐」として、「火」として落ちてこられました。「嵐」も「火」も神の臨在を表す言葉です。

「激しい風」は、バルトのように「嵐」と訳す事もできますし、「烈風」「暴風」とも訳せる言葉です。その「激しい風」がどのようなものだろうかと思ひめぐらしていると、「オズの魔法使い」を思い出しました。アメリカのカンザス州に住む女の子ドロシーが家ごと巨大な竜巻に巻き込まれ、魔法の国オズに連れていかれる物語。巨大な竜巻、暴風には、人の体は勿論、大きな建物をもいとも簡単に空高く巻き上げ、地面にたたきつけて粉々に砕く恐ろしい力があります。聖霊は、全知全能の神の力を持って私達人間を高く巻きあげ、地面にたたきつけて粉々にする激しい嵐に譬えられる神なのです。

そして、3節の「炎のような舌」に出てくる『炎』は、絶対的に聖い神の炎。預言者イザヤは神の召しに答える前、み使いによってその唇を、神の炎で焼かれた、とイザヤ書は伝えます。神から御覧になれば、私達人間は、罪とがに満ちた穢れ多い存在。神は、ご自身の炎で、人間の穢れを燃やし清めずにはおられないのです。つまり、「嵐」と「炎」、どちらも、指し示しているのは、神の審きです。使徒達の上に落ちかかって来た聖霊なる御神は、大いなる力、聖なる力をもって彼らを裁き、支配されるお方であり、落ちかかって来たのは、絶対者である神の審きです。誰が聖霊なる御神の嵐の中で無事であることができるでしょうか。聖霊なる御神の炎に焼き尽くされずに済むほど聖い者がいるのでしょうか。神の審きが行われる所、私達人間は滅びるしかありません。「滅ぼさないでください」という微かな声も、激しい風に吹き飛ばされ、炎に焼き尽くされるだけです。

しかし、この聖霊なる御神の審きを考える時、私達は、この聖霊がいつ使徒達の上に落ちかかってきたのか？その事に目を向けねばなりません。それは「五旬祭の日」であった、と聖書は語ります。「五旬祭」は、過越祭から五十日目にあたる小麦の収穫感謝祭が起源のお祭りです。主が十字架の死から甦られた日から、49日目にあたります。つまり、主イエス・キリストの復活と深い関係がある日なのです。しかも復活の主イエス・キリストは、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、又、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒1:8)と確かに約束されました。この甦りのキリストの約束の成就として、聖霊なる御神が、使徒達の上に落ちかかって来たのです。そう、聖霊降臨は、復活節の約束の成就です。このキリストの復活節の約束のゆえに、聖霊なる御神の審きは、滅びで終わる審きではありません。確か

に、使徒達も私達も、聖霊による御神によって裁かれます。ですが、その審きは恵の審きなのです。審きのただ中に赦しがあり、死の向こうに新しい命が与えられます。

3 聖霊は満たす方

さて、2節の「激しい風が天から吹いてくるような音が聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」とあります。ここをもっと正確に訳せば、「天から吹いてくるような音の響きが家中を満たした」になります。又、4節には「一同は聖霊に満たされ」とあります。このように、聖霊なる御神は、空間に満ちるお方です。イエス・キリストは、遙か遠い父なる御神のもとから、人間の体をとってこの地上に来られました。が、聖霊なる御神は、その神の独り子とは異なる在り方でこの地上に落ちて来られました。このお方は、目には見えませんが、空間を満たすお方。聖霊なる御神は、空間に満ち満ちて、私達をとり囲み、私達の内へと浸透していかれるお方なのです。

その様子は、3節「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」という部分に描かれています。炎というのは、先ほども申し上げましたが、神の審きの徴です。しかし、それだけではありません。「炎のような舌」の「舌」は、「言葉」という意味も持つ単語です。つまり、「炎のような舌」というのは、「炎のような言葉」なのです。

「炎の言葉」と訳しなおした時、エマオの聖餐の食卓が思い起こされました。エマオの道行の話を皆さんは覚えておいででしょう。主の復活が信じられない二人の弟子は、暗い顔をしてエマオ村に帰る道をたどります。そのうしろを復活の主イエスが追いかけてくださり、主は二人と共にエマオまで行きましたが、二人は主だと気づきません。道すがら、主イエスは聖書を解き明かしてくださいました。やがてエマオ村につき、主は二人と共に夕食の席に着きます。主イエスがパンを取り賛美の祈りをささげて裂き二人に与えた時、彼らの目が開け、共に旅した人が主イエスだと気づきます。が、その瞬間、主のお姿は見えなくなりました。二人は「道で話しておられた時、私達のこころは燃えていたではないか」と語り合い、急いでエルサレムへと戻りました。彼らの心は、主イエス・キリストの言葉によって燃えていたのです。つまり、主イエス・キリストの言葉は、人の心を燃やす炎の言葉だと言えるのです。そう、今日の場面で使徒達に与えられたのは、イエス・キリストの言葉。聖霊なる御神が満ち満ちた者の心には、主イエス・キリストの言葉は炎として燃え上がり、心の内を照らし清めてくださるのです。

4 聖霊とは私達の見方を変えてくださる方

では、主イエス・キリストの言葉が与えられる、とどうなるのでしょうか。その一つに、主イエス・キリストの側に立ち、全く限定的ではありますが、主イエスが御覧になるように、この世界を見ようとする、事があるように思います。

私達は、この世界を自分達の見方でしか理解できない者です。前にも言いましたが、皆さんがよくご存じの桃太郎という話を見ても分かります。桃太郎と同じ村の人にとって、彼は

英雄でしょう。けれども、鬼ヶ島の住民にとっては、桃太郎とその一味は強盗にすぎません。私達は、自分の置かれた立場や考え、利害に囚われてしまいます。物事を公平に見ることは難しく、世界を広く見るにも限界があります。桃太郎も鬼たちも、立つ位置が変われば、世界は変わって見えるでしょうし、桃太郎も鬼たちも変わって行くでしょう。

そんな事を考えていた時、(前牧師夫人の)喜田川悦子先生の葬儀の際に、道世姉が「悦子先生が愛していた」と教えてくれた言葉を思い出しました。悦子先生のお父様で伝道の為に無医村の医師となって働いた公文嘉実兄がよく言っておられた言葉のようです。「人を見ずして、天を見よ。」人ばかり見ているは、私達はその罪に巻き込まれてしまう。眼差しを高く高くあげ、天を見なさい、天を見て祈りなさい。その時、聖霊なる御神が私達の上へ落ちて来てくださり、私達の心を高く高くまきあげてくださる、そうしてこそ、私達は造り変えられ、新しくこの世界をイエス・キリストの側に立ってみる事ができる、そういう意味がある言葉ではないか?と思いついたのです。今日の共に賛美した讃美歌21の18番「心を高くあげよ！」も同じことを歌っています。

聖霊なる御神のみ力によって、心を高く挙げていただき、私達は、自分達が日常生活を営むこの世界が、父なる神とイエス・キリストが深く愛しかかわってくださっている世界だと確信できるのです。そのようにして、聖霊なるお方は私達の想いや考えを変える力をお持ちの御神です。

5 実践する力を与える聖霊なる御神

そして、聖霊なる御神は、炎の言葉、主イエス・キリストの言葉をお与えくださり、私達をキリストの証人としてくださいます。私達は、自分達の力では、主イエス・キリストの証人にはなれません。なぜなら、主イエスの真の証人は、自分自身の在り方で、自分の証言が正しいことを証明する者だからです。どんなに立派な事を言っても、その言葉をさっぱり行わない人がいたとしたら、どうでしょうか。「あの人は口ばかりだ」と、その人自身だけでなく、その言葉も信用されなくなるでしょう。私達が主イエス・キリストの証人となるには、主イエス・キリストの教えをも守って生きねばならない、しかし、主イエス・キリストの言葉を行うことは、人間の力では到底できることではありません。私達、敵を愛する事などできないし、隣人を心の中で裁くことも度々でしょう。どんな人とも互いに愛し合う事がどれだけ難しいか、皆さんもよくよくご存じの事です。私たちは途方にくれます。

しかし、「神にできないことはない。」私達は、聖霊なる御神が満ちあふれる空間で深呼吸し、聖なる風を深く吸い込む時、父なる御神の愛が私達の心に注がれ、篤く燃え上がり、新たなる自分へとつくりかえられていきます。そうして、私たちは「未だ成ったことのない者」へと、聖霊なる御神によって新しく変えられていきます。聖霊なるお方により、自分の限界を更新して、イエス・キリストの証人として成長し続ける者、それが私達です。

こうして見ると、聖霊なる御神は、私達がイエス・キリストに従って生きて行く具体的な力を与えてくださる方、とても実践的な力をお与えくださる御神だと分かります。パウロは、聖霊

なる御神のこのような実践的な働きを次のように語っています。「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ローマ信徒への手紙5:3~5) 聖霊なる御神によって私達は試練を忍耐し練達して希望に生きることができる！と実際に神の愛によって生かされ続けたパウロが証しています。この地上を聖霊なる御神に助けられ、キリスト・イエスの証人として生きたその先には、命の主イエス・キリストが手を広げて待ってくださいますし、父なる御神と主イエス・キリストのもとには、聖霊なる御神も満ち満ちて、全てに於いて全てとなっておられるのです。

先週、ロシア軍がウクライナに侵攻した、というニュースが世界中を駆け巡りました。このようなあからさまな武力侵攻は、東西冷戦終結以来、初めてのこと。ロシアのプーチン大統領は、核兵器の使用さえほのめかしました。この世界のもろさを突き付けられた思いです。新型コロナウイルス・パンデミックの中で第三次世界大戦の危機に直面した2022年、聖霊なる御神を与えられている私達は、どのように主イエス・キリストの証しを為していくのか。

まず、今は、ロシアのウクライナ侵攻で苦しむ人々に思いを向けたい。ウクライナの冬は厳しい、寒さに凍え、砲撃の音に怯え不安に悩める人々を思い、軍の命令で人の命を奪い、本人達も自覚できない程に深く傷ついたロシア兵の魂も思います。主イエスは深く嘆いておられる、悲しんでおられる。この御子の悲しみに、人々の痛みに関心をもたせたい、と願います。この戦いによって傷ついた人々を思い、父なる神に祈りをささげ、助け合いたい。そこから始めたいと思います。

隣国が独裁国家であるという点では、日本もウクライナと同じです。そして、日本の民主主義じたいが、現在、大きく揺らいでおり、独裁者を生み出しかねない状況にある、と私は思います。私たちの住む日本は、これから今以上の大きな試練の時を迎えるでしょう。第二次世界大戦の時のように、キリスト者一人一人の在り方が問われる時代がやって来るように思います。

しかし、どのような時にも、聖霊なる御神のみ力により、主イエス・キリストの御心を行う者とさせて頂きたい、と心から願わずにおられません。自分にあきらめず、父なる神を諦めずに行きたい、いえ、諦めずに行くことができます。なぜならば、主イエス・キリストの証人として、父なる神を宣べ伝えたい、と願う者の心には、神の愛が溢れるほど豊かに注がれ、聖霊なる御神が満ち満ちてくださるから、キリストの言葉が炎のように燃えてくださるから。どんな時にも聖霊を通じてキリスト・イエスを示し、義なる愛を注いでくださる天の御神に感謝いたします。